

第40回大阪の医療と福祉を考える公開討論会

「人生の最終段階」気楽に話す機会を

大阪府医師会は10月13日午後、府医会館で第40回大阪の医療と福祉を考える公開討論会を開催しました。今回は、『看取る』ということ——最期の思いを大切に」をテーマに意見を交わしました。



第1部では、上田崇順・毎日放送（MBS）アナウンサーが司会を務め、パネリストとして、鹿島洋一氏（新仁会病院長）・古川圭子氏（MBSアナウンサー）・本会の阪本栄理事が登壇。人生の最終段階の過ごし方について討論しました。



茂松会長

主催者を代表しあいさつした茂松会長は、今回の趣旨を説明するとともに、「晩年、自身がどう過ごしたいかを考え、話し合い、その意思を家族や医療関係者らと共有しておくことが非常に大切」と述べました。

◆希望に沿う治療——鹿島氏



多死社会の到来で、事前に「人生の最終段階の過ごし方」を考え、それを周囲と共有しておくことが重要と話され、「医師としては本人の希望に沿った医療を提供したい」と語りかけました。また、別の例として、「本人の意向に沿えた看取り」を紹介し、事前に「自身が受けたい医療・ケア」を示しておくことが大事だと述べられました。

◆おだやかな死に満足——古川アナ



古川アナは、ご自身の父親を自宅で看取った際のエピソードを初めて披露されました。日常の中で自然に死が訪れ、自身が想像していた様子と異なっていたと振り返り、「おだやかな死を迎えられたことに、家族としても満足している」と述べられました。そして、様々な機会でも「気軽」に話し合ってほしいと呼びかけられました。

◆ACPの活用を——阪本理事



阪本理事は、高齢化率は今後も伸び続けると指摘した上で、人生の最終段階を「自分らしく」過ごすための環境について考え、尊厳ある生き方を実現することが重要と述べました。そのための一環として、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）を紹介。「前向きに生き方を考える」手法とあると同時に、「残される家族のためにも話し合いをしてほしい」と訴えました。